

春画の「日常性」

矢野明子（ロンドン大学東洋アフリカ学院ジャパン・リサーチ・センター）

石上阿希（発表担当者／国際日本文化研究センター）

春画の「日常性」なるものを考える際には、あらかじめ二重の陥穽に注意する必要がある。ひとつは「性」という、人間に普遍的な事柄を主題とすること。もうひとつは、江戸時代の春画（特に版面による）に特徴的な、「庶民」の日常生活に場面を設定して「表象する」ことである。春画が江戸時代庶民の性生活をありのままに描き出していると短絡できないことは言うまでもない。『古今著聞集』に記述される、鳥羽僧正（覚猷）と絵の一種のリアリズムについて議論をする法師が、性器の誇張表現を例に挙げていみじくも言うように、性の描写に「絵空事」の要素が入る伝統は古く遡れるようである。また、江戸時代後期の川柳が「馬鹿夫婦春画を真似て手をくじき」と詠んだとおり、春画のファンタジー性はひとつの大きな特色である。

日常性に仮託した江戸時代の春画は、そこに何を表現しようとしているのだろうか。一口に春画と言っても、その実態は内容・質・媒体といった点において多岐にわたる。中でも質量ともに最盛期を形成した江戸時代の春画・春本に焦点を絞ってみれば、性を契機にそこに描かれ語られる内容の主なもの、四季の移ろいや行事・風物といった日々の人間の営みを背景に、老若男女誰もが性行為に耽りたのしむ様や、性の交歓をする者同士の仲睦まじさや気のおけなさ、といった一種の性の理想像、そしてユーモアを媒介にして性を語る娯楽性、さらにはパロディや諷刺といった批評的態度が挙げられる。そこに描かれる情景は専ら庶民の日常であったが、それらの序文や巻頭を飾る本文では、しばしば性を祝祭し、子孫繁栄を願う。それゆえに、春画・春本は婚礼の儀に付属する品物として扱われていた。「日常性」と「ハレ」の混在もまた、春画・春本の特質の一つといえる。

江戸時代の肉筆春画は個人の注文品として何ら規制の対象にはならなかったが、出版物としての春画・春本は、享保の改革による出版統制令以降、表向きには存在しないはずの作品だった。しかし実際には、貸本屋という流通経路を通じて春画・春本は読者の元に届けられ受容されていた。それらは公刊のルートを離れたところに存在し、定期的な取締りを受けることなく黙許されていたという不可思議さがある。近代になると性表現が検閲と隣り合わせのケースは多数見られるが、江戸時代には性表現そのものが問題視されたのではないようだ。江戸時代の庶民文化のひとつとして隆盛を誇った春画は、当時においてはいわゆる「芸術」の範疇には入らず、出版物としては「不在」の「存在」だった。一方で、先述したようにこれらは貸本屋の主力商品の役割を担っており、「売れる」ことを常に意識した編集・描写がなされていたことも忘れてはならない。そのように複雑な属性を与えられた春画が「日常」を描くことは、単に無邪気なスケッチとして通過はできまい。春画の文化的意義の模索は現在進行形である。2013年秋に大英博物館で開催された特別展 'Shunga: Sex

and Pleasure in Japanese Art' に向けた研究プロジェクトから得られた知見に拠りながら、春画の特質について紹介する。